

短編「リジー・ライ」について

多比羅 眞理子

(1)

ギヤスケル夫人は1848年、『メアライ・バートン』*Mary Barton*で、貧困に喘ぐ労働者達の悲惨な生活振りをリアルに描いた。その中で、主人公がジョン・バートンの妻の妹で美しい娘・エスタアが現実の苦しい生活から逃れ、豊かで、華やかな日々に憧れて家出をし、その結果、道を踏み外し街の女になる様子を下層階級の労働者達を襲う不幸の一つとして描いている。

次に、ギヤスケル夫人はエスタアのように、転落した少女リジーと、その家族に焦点を当て、1850年、短編『リジー・ライ』*Lizzie Leigh*を発表した。

本論では、この短編に登場する3人の女性達、リジー、母親のライ夫人、そして、リジーの兄ウィルが思いを寄せるスーザン・パーマーについてのギヤスケル夫人の視点について考察するものである。

(2)

ギヤスケル夫人は、工業都市・マンチェスターの牧師夫人として、苛酷な労働条件のもとで働かされ、貧困のために社会の底辺で苦しみ、喘ぐ娘達の存在に直に接する機会が殊の外多かった。彼女達の多くは、洗濯、掃除などの雑働き、工場労働者や店員、お針子などで、労働時間、賃金などの点から見ても、決して楽な仕事ではなかった。その中には、苦しい生活を支えるため、または華やかな都市生活の陰に潜む誘惑に負け、道を踏み外し、街の女となるのが当時多く見られた。

転落の理由がどのようなものであれ、道徳律の厳しかったヴィクトリア朝時代の社会は、一度道を外した娘達には厳しく、救済の道は殆ど無かった。社会はもちろんのこと、家族からも恥ずべき、汚れた娘として見離され、追放されることが多かった。そして、絶望の余り、自殺をしたり、一生街の女

として生きる娘達や、私生児の誕生などが日常的に見られたのだった。

ギヤスケル夫人は同じ女性として彼女達の痛みに深い同情の念を覚え、これら堕ちた娘の救済に心を砕いた。そして、墜ちた娘を主人公とした作品『リジー・リー』を書くことで、救済の道を示した。

A. W. ワード (Ward) 教授は『リジー・リー』の一部分は『メアリー・バートン』より前に書かれたのではないかと推測している。即ち、転落し、追放されたエスタアの経過がこの短編の中に幾分子想され、再現されているように思えるからだと述べている。¹

また、その頃ギヤスケル夫人は1853年に出版され、社会に一大センセーションを巻き起こした作品『ルース』*Ruth*のモデルと思われる道を踏み外した少女・パーマー・バーデット・コルト (Palmer Burdette Coult) の救済に携わっていた。このパーマー嬢のカナダへの移住に共に携わったのがチャールズ・ディケンズ (*Charles Dickens*, 1812~70) である。²

当時押しも押されぬ一流作家として世に名声を博していたディケンズは、1850年3月「墜ちている人達を引き上げ、社会状態の総合的な改革」を旗印に週刊誌『聞き慣れた言葉』*Household Words*を発刊した。³

彼のこの雑誌に寄せる信念には、ギヤスケル夫人の小説の根底に流れるものと相、通ずるものがある。

それはヴィクトリア朝時代の経済的繁栄の礎となった下層階級の貧しい人々に対して、あたたかな同情を寄せ、階級間の或いは人間間の様々な争いを、人間愛と善意とで解決しようという姿勢である。

雑誌の発刊に先立って、ディケンズはギヤスケル夫人の『メアリー・バートン』を読み、深く感動し、彼は創刊号への寄稿を夫人に依頼したのだった。

... but as I do honestly know that there is no living English writer whose aid I would desire to enlist in preference to the authoress of *Mary Barton* (a book that most profoundly affected and impressed me), I venture to ask whether you can give me any hope that you will write a short tale or any number of tales, for the projected pages.⁴

メアリー・バートン (この本に私は深く感動し、感銘を受けました) の作者に優先して私が協力を得たいと思う作家は今、現在他にいないと確信するのです。ですから、私が考えているものにあなたが短編か、連載物語を書いてくださるよう心から願いたします。

こうして1850年3月30日、短編「リジー・ライ」は「聞き慣れた言葉」の創刊号の巻頭を飾ることとなった。

(3)

物語は、人が皆、主イエスの誕生を祝う喜びの日に、主人公リジーの父ジェームス・ライが死を迎える場面で始まる。これはライ一家を覆う悲劇的な状況を暗示する。

ジェームスは妻、アンが一人娘リジーを可愛がり過ぎ、このまま家においては我儘になるばかりと、世間を知らせようと思いつつ。そして、農村から大都会のマンチェスターへ、妻の強い反対を押し切って奉公へ出したのだった。

これは当時のヴィクトリア朝によく見られた子供に対する考え方・・ spare the rod and spoil the child : 可愛い子には旅をさせよ…⁵であり、ジェームスだけが我が子に対して厳しかったわけではない。

しかし、結果は彼の思惑を外れ、静かな農村で育った、純粋で無垢な16歳の少女・リジーは都会の欲望渦巻く世界に足をすくわれ、誘惑され、身ごもり、奉公先を追い出された。

正直で、厳格な父親にとって、娘の行動は決して許せない、不名誉な恥以外の何物でもなかった。したがって、リジーは死んだものとして、妻はもちろんのことほかの子供達にも、リジーの名を口にするこゝとさえ許さなかった。

ジェームスのこの怒り、厳しさは、当時のヴィクトリア朝の時代のこの種の転落した少女・娘達を取り囲む社会・世間の一般的な見方である。

すなわち、ここで、ギヤスケル夫人はジェームスの存在をヴィクトリア朝の道徳観を象徴するものとして描いている。

次に、この父の厳格さを受け継ぐ存在として、リジーの兄ウィルが登場する。

彼もまた、リジーは家族の恥—family shame— (p. 211)⁶として受け止める。したがって、後に彼が思いを寄せるスーザン・パーマーが妹リジーの始末を聞いたら、自分もリジー同様に汚れた存在と必ずやスーザンは考え、自分のもとから去るだろうと恐れる。

彼は父親同様に、妹の状況を、転落の真の理由を探る事よりも、恥・shame という社会の思惑、道徳観に縛られている。

これら二人に共通していることは、社会規範からはずれたリジーを聞きよ

うとするあまり、家族として、そして人間として「赦す」心を忘れている。これはとりも直さず、当時の冷酷とも評されるヴィクトリア朝の道德観・心を忘れた人々の象徴である。

(4)

夫ジェームス、そして息子ウィルとは対照的に、母親のアン・リー夫人は奉公先から姿を消した娘をひたすら案じ、無事を願う愛情深い母親としてギヤスケル夫人は描いている。

リジーが失踪するまでは、彼女にとって夫とは、妻に絶対的な信頼と、服従を求める人であり、また夫は神と自分との間に在る人でもあった。まさにヴィクトリア朝時代の理想とする女性、それは「エペソ人への手紙」の聖パウロの言葉、「妻たるものよ。主に仕えるように自分の夫に仕えなさい。・・・夫は妻のかしらである。・・・子たるものよ。主にあって両親に従いなさい。・・・」(5-22, 6-1) を、社会的に具体化したものである。

従って、彼女の価値基準は自分の内面に照らし合わせたものではなく、夫の、即ち社会の価値基準に従うものだった。そこには疑念を挟む余地すらなかったのだ。

しかし、その神のごとく正しいはずの夫に従った結果、最愛の娘が過ちの道へ入ってしまった。リー夫人は間接ながらも、娘の転落に親として手を貸したという強い悔恨の念にかられる。その結果が、夫に服従するだけの従順な妻から、おのれの意思を持ち、その意思に従って行動する妻へと変えるのだった。

まず、彼女はジェームスのように、リジーを社会の規範から外れ、脱落した者として切り捨てる事を母親として拒絶した。

次に、盲目的に夫に服従することを放棄し、沈黙の3年間の日々を送ることで夫のリジーに対する考えの過ちを正すという手段に訴えた。ジェームスは死の床で

“I forgive her, Annie.”

p.206

「あの娘を赦すよ、アニー。」

と言って息を引き取る。この言葉こそ、社会の規律や道徳、厳格さに何よりも重きを置いて来たジェームスが、ひたすら子を思うリー夫人に敗北したことを意味する。

ヴィクトリア朝にあつては、一度結婚した女性には、自分自身の肉体はおろか、二人の間の子供さえ夫の所有物であつて、妻には法的にも何等権利が与えられていなかった。⁷

したがつて、精神的自立など当然認められるものではなかつた。このような時代に、ギヤスケル夫人はリイ夫人に自分の意思を持たせたのである。これはギヤスケル夫人が夫婦間の不平等を是認する社会に対して大きな挑戦を挑んだと言えよう。

A. ウォルター (Anna Walter) 女史も「自分自身の性格を男性に従属させることが、当時のヴィクトリア朝の女性の役割であり、結婚だつた。・・・ギヤスケル夫人はその結婚制度を批判したのである。」⁸と述べている。

未亡人となつた今、名実ともに夫に服従するという足枷から開放された。夫ジェームスが亡くなつた日は主イエス・キリストの誕生の日である。ギヤスケル夫人はその日を自分の意志のもとで、自分の足で歩こうとするリイ夫人の誕生の日とした。

夫人は農場を貸し、子供達と共にマンチェスターに移り住み、夜毎、街の女達が姿を現しそうな界わいでリジーを必死に捜す。

彼女をそこまで駆り立てるのは、娘を案ずる限り無く深い母親の愛情と、聖書「ルカによる福音書」(15-11)の「放蕩息子」(p. 208)に導かれる赦しの愛の精神である。

これらの愛がジェームス亡き後のリジー一家を導くものとなる。

W. ジェラン (Géren) 女史は次のように述べている。

... the love and compassion of Lizzie's mother being held up as a beacon in the surrounding darkness.⁹

リジーの母親の愛情と同情は、周囲の暗さの中で、かがり火として差し出されている。

以上のように、ギヤスケル夫人はまずリイ夫人に母としての愛に導かれた自立の、新生の第一歩を歩ませるのだった。

(4)

16才のリジーにとっては、一時の軽率な行動が彼女の人生を狂わすこととなつた。そして「男性の裏切り行為によって犠牲者となつたリジー」¹⁰、奉公先からはふしだらな娘として追い出され、ましてや厳格な父のいる家には帰

ることも出来ない。貧民救済院で赤ん坊を産み落すが、そこも体力の回復を待って出される。若く、無力な、みどり児を抱えたリジーが、一人で生きていくことは出来ない。彼女はかつての奉公先となりでお針子として働いていた女性にわが子を強引に預け姿を消す。この女性がスーザンである。

そのときリジーは、

“Call her Anne.” p.224

この娘を「アン」と呼んで。

と紙の切れ端に書き残す。この名前こそリジーの母親リイ夫人の名前であり、赤ん坊の服は、以前夫人がリジーと一緒に買い求めた洋服地で作られていた。

これはリジー自身の行動の深い後悔の念と、田舎での家族揃っての平穏な日々への追憶の念とを表すものとして受け止められよう。

我が子を捨てたとはいえ、リジーはその子への愛情まで捨てたわけではなかった。我が子を育てるだけの知恵も経済力もないリジーが、金銭を容易に得ることといえば、身体を売ること以外は無。彼女は女性としてもっとも苛酷な撰択をすることで、お金を稼ぎ、その金をスーザンの家にそっと差し入れる。それがリジーに許された、そして最大限の、娘への愛情だった。

もはや、彼女は親元にいた時の無知な、リジーではなく、我が子のためには身を売ることともいとわぬ強い母として姿を現す。

当時の身を落とした多くの娘達が、死を選んだのに対して、ギヤスケル夫人は不運な境遇にあっても、リジーに生きる希望を勇気を持たせた。

ジェラン女史によると、当初、ギヤスケル夫人は他の転落した娘達同様に、リジーの死で物語を終えるつもりだった。しかし、ディケンズはその結末に次のように異論を唱え、3月30日に発行予定にもかかわらず、3月14日に、編集者としてギヤスケル夫人に書き直しを進めたという。¹¹

I am strongly of opinion that as Lizzie is not to die, she ought to put that child in Susan's own arms, and not lay it down at the door. Observe! - The more focibly and strongly and affecting, you exhibit her mother's love for her, the more cruel you will make this crime of desertion in her.

リジーが死ぬべきでないように、その子供を戸口に捨てないで、スーザン自身の腕の中に預けるべきというのが私の強い見解です。よく考えてご

らんなさい。力強く、強行に、そして感動的に、あなたがリジーの母親としての愛を示せば示すほど、子供を捨てるというこの罪が一層残酷なものとなるでしょう。

そして、再び苛酷な試練がリジーを待っていた。それは、今はナニーと名づけられた娘が階段から落ちて死んだのだ。お金を置に来たリジーが、偶然ナニーの事故に遭遇する。ナニーの死を知った時のリジーの悲嘆ぶりは彼女の悲劇性を一層高める。

I am not worthy to touch her, I am so wicked. ... May I have my own child to lie in my arms for a little while? ... The mother kept smiling, and stroking the little face murmuring soft, tender words as if it were alive. She was going mad, Susan thought.

pp.233-234

「私はあの子に触る資格はないわ。とても汚れているから。・・・ほんのちょっとだけあの子を私の腕に抱いても良いかしら。」・・・その母親は、ほほ笑み、その子がまるで生きているかのように、低く、優しい言葉を吐きながら、小さな顔を撫で続けた。彼女は気が違うんだとスーザンは思った。

A. イースン (A. Easson) 女史が、ナニーの死の意味を「リジーが家族へ戻るために支払わねばならなかった代価」であると捕らえているように、¹²リジーの犯した罪の償いは、家族から追放されるばかりでなく、最終的には子供の死をもってなされなければならなかった。

後に、スーザンの家で再会したライ夫人とリジーは、兄のウィルとスーザンと共に再び故郷の農場に戻る。母娘は人目のつかない窪地の小屋に住み、亡きナニーを思い、リジーは自分の犯した過ちを悔い、罪の許しを求め、祈る日々を送るのだった。

そして、病に苦しむ人、悲しみ嘆く人々の話に耳を傾け、彼女の助けを求める人の為には、人目を避けた世界から出て彼らへの助力を惜しまなかった。今や、多くの人々はリジーのその優しい心にただ感謝するばかりだった。こうして、物語は幕を下ろす。

A.ポラード (Arthur Pollard) 教授が『リジー・ライ』は最終的には報われる母親の愛の物語である。』¹³と述べるように、母親としての愛が、従来のヴィクトリア朝の夫に盲目的に従うだけの存在から、自己の価値観に従って行動する人間へと変えた。更に娘へのひたむきな愛がリジーを捜しだし、彼女を人生の裏道から救いだしたのだった。

一方、リジーも子供を産み、母親としての洗礼を受けたことで街の女の辛い日々を過ごす事が出来た。ギヤスケル夫人は娘ナニーの誕生、そしてその子の死という苛酷な償いを通して、彼女の心の中に慈悲の心という新天地を与えた。

これこそ、ギヤスケル夫人が転落した娘・リジーへ授けた救済・再生の道と言えよう。

このギヤスケル夫人の転落した娘達の再生の一つの方向づけは次作『ルース』へと更に発展するのである。

(5)

最後に登場する女性が、スーザン・パーマーである。ウィルが思いを寄せ、突然リジーから見も知らぬ赤ん坊を預けられるが、その子を自分の姪と称して限り無い愛情を注ぎ育てた女性である。スーザンは酒に溺れる父親を養い、ナニーのために勤めを止め、私塾を開いて生計を立てている。

近所に住む人は彼女を次のように語る。

She's just one a stranger would stop in the street to ask help from
if he needed it. p.221

見も知らない人が困って、通りで立ち止って救いを求めるとしたら彼女はまさにその救いを求められる人だよ。

そのスーザンと、ウィルは酔ったスーザンの父親を助けたことで知り会ったのだった。

リジーの転落を「家族の恥」と捕らえ、自分の想いをスーザンに伝えられずに苦しむウィルのために、ライ夫人はスーザンを訪れ、ありのままの事実を語った。(この行為も、ライ夫人の息子ウィルへの愛から出たものと捕らえられよう。)

She's not one to harden her heart against a motner's sorrow. ... She is not one to judge and scorn the sinner. ...Here's Susan, good and pure as the angels in heaven, yet like them full of hope and mercy, and one who, like them, will rejoice over her as repents. pp. 228, 229

彼女は母親の悲しみに対して心を鬼にする人ではない。・・・彼女は罪人を裁き、責める人ではない。・・・天の天使のように善良で、汚れの無いスーザン、しかも、天使のように希望と慈悲に満ち溢れ、悔い改める者を祝福する人だよ。

とリイ夫人はスーザンをこう理解した。

ギヤスケル夫人はスーザンを、罪を犯したのものにも、その罪だけで判断すること無く、受け入れ、赦すという最高の慈しみの心を持った女性として描いた。この慈しみの心を夫人はジェームスとウィル、すなわち、当時の社会の人々に求めたのである。

スーザンの愛に満ちた姿は聖母・マリアそのものである。そのスーザンにナニーが預けられたことは、罪の子ナニーがスーザンの胸の中で清められたと言えよう。

そして、みどり児ナニーを育てるスーザン自身もリイ夫人、リジー同様に母親の愛に輝いているのである。

スーザンの影響はウィルにも及ぶ。

父親のジェームスと同じ、ヴィクトリア朝の厳しい道徳の価値観を象徴するウィルが、リジーを激しく非難する言葉を聞くとスーザンはウィルを次のように諫める。

Will Leigh ! I have thought so well of you ; don't go and make me think you cruel and hard. Goodness is not goodness unless there is mercy and tenderness with it. pp.237-238

ウィル・リイ！私はあなたがとても良い方だと思っていました。どうぞ、あなたが、無慈悲で、冷酷な方だと思わせないで。善意とは、そこに慈悲と優しさがなければ善意ではないのです。

このスーザンの言葉こそ、当時の一度堕ちた娘達に対して切り捨てるだけの、何ら暖かな手を差し伸べようとしないうるせうなヴィクトリア朝の社会に対

する、ギヤスケル夫人の憤りの言葉である。

ウィルは自分の愛する人の言葉をここで改めて考えようとスーザンに約束し、妹リジーを赦すのだった。

こうしてスーザンはウィルを変えたのである。

これは、ジェームスがアンに敗北したのと同様に、ヴィクトリア朝の価値観のウィルが敗北したことを意味する。

スーザンこそ、偏見や世の慣習の縛られること無く、人の道理をわきまえ、同時に、私欲の無い、慈悲溢れた女性である。

そして、その姿は、子を失い、故郷で隠とん生活にも似た生活のなかで、悩み、苦しむ人々に救いの手を差ししのべるリジーの後年の姿と重なる。

ここに、ギヤスケル夫人の求め、理想とする女性の姿を私達は見いだす。

(6)

以上のように、ひた向きに子供に寄せる母としての愛、慈悲の心と優しさが本編に登場した3人の女性に共通するものである。

ギヤスケル夫人は、この作品に表れた女性達を、それぞれのパートナー…アン・リイは夫ジェームスより、リジーは彼女を誘惑し、簡単に捨て去った男より、そして、スーザンはウィルよりこの愛の深さではずっと勝る人として描いている。

すなわち、慈悲の心を持ったものこそが、ヴィクトリアの冷酷とも言える厳格な規律を重んじる男性達の心の門を打ち開くことが出来るとするギヤスケル夫人の信念がここに見られる。それが例え、街の女という世の人達から後ろ指を刺されるような存在だったとしても、慈悲の心を持つものが何よりも優るという信念である。

A.ウォルター女史は「同情、暖かさ、忠誠、愛、そして忍耐がこの物語の女性達の規範である。」と述べ、¹⁴アーノルド (Arnold) 博士の未亡人は、『リジー・リイ』を読み、共感し、次のような言葉で終わる手紙を送ったという。

May the sinful and sorrowful and the oppressed be taught and cheered and helped by you and they severally need; and may the hard be softened, and the careless roused.¹⁵

この罪深き、痛ましい、そして虐げられた者が、あなたによって教えられ、

励まされ、救われますように、それを彼女達はそれぞれ求めているのです。
そして、厳しい者は和らぎ、軽率な者は目を覚ましますように。

この様に、短編『リジー・ライ』の中で、ギヤスケル夫人はダブル・スタンダードの、男性本位の世にあって、何時も傷つき、犠牲を強いられる弱い立場の女性達に慈悲の心を授けることでその反撃の一矢を放ったのである。

ギヤスケル夫人は声高に女性達の権利や優位性を主張するのではなく、登場する女性達に様々な試練を授け、その試練を通して彼女達の自己の確立を促したのだった。

引用文献

- 1) W.A.Ward, Introduction to "Cranford ETC.," *The Works of Mrs. Gaskell*, Vol.1, Vol.2 by Elizabeth Gaskell, (New York : AMS Press, 1972), xxxiv.
- 2) Winifred Geren, *Elizabeth Gaskell : A Biography*, (Oxford : Oxford University Press, 1977), p.104.
- 3) John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention*, (Sussex : Linden Press, 1970), p.93.
- 4) *Ibid.*, p.93.
- 5) Pasty Stoneman, *Elizabeth Gaskell*, (Sussex : The Harvest Press, 1987), p.30.
- 6) Elizabeth Gaskell, "Lizzie Leigh" *The Works of Mrs Gaskell*, Vol.3.
以下本文中の引用文のページ数はこの版による。
- 7) Stoneman, *op. cit.*, p.56.
- 8) Anna Walters, Introduction to Elizabeth Gaskell *Four Short Stories* (London : Pandora Press, 1983), pp.4,5.
- 9) Geren, *op. cit.*, p.107.
- 10) *Ibid.*, p.166.
- 11) *Ibid.*, p.107.
- 12) Angus Easson, Introduction to Elizabeth Gaskell *Cousin Phillis and Other Tales*, (Oxford : Oxford University Press, 1987), ix.
- 13) Arthur Pollard, *Mrs Gaskell : Novelist and Biographer*, (Massachusetts : Harvard University Press, 1967), p.180.
- 14) Anna Walter, *op.cit.*, p. 12.

15) Ward, *op.cit.*, p. xxv.

参考文献

1. 北条 文緒、クレア・ヒューズ、川本静子編、ヒロインの時代別巻「遥かなる道のり：イギリスの女性達 1830-1910」 国書刊行会、1989.
2. 角山 栄 「生活の世界歴史10 産業革命と民衆」、河出書房新社、1992